



**Data**

監督：武正晴  
 原作：桜木紫乃『ホテルローヤル』  
 (集英社文庫刊)  
 脚本：清水友佳子  
 出演：波瑠/松山ケンイチ/余貴美子/原扶貴子/伊藤沙莉/岡山天音/正名僕蔵/内田慈/冨手麻妙/丞威/稲葉友/斎藤歩/友近/夏川結衣/安田顕/和友龍範/玉田志織/長谷川葉生

👁️👁️ みどころ

『ホテルニュームーン』(19年)は、日本・イラン合作映画らしく(?) 社会派ドラマだった(?)が、北海道の釧路湿原にあるラブホテル『ホテルローヤル』をタイトルとした本作は?

アダルトグッズの販売もラブホでは大切な日常だが、いくらそこで生まれ育ったとはいえ、美大受験に失敗したため、やむなくそこで働いている雅代のそこの日常は? 「お客A」と「お客B」がそこで過ごす非日常は興味津々だが、心中事件を起こしてしまう「お客C」のカップルは?

ラブホの経営はある意味気楽? バブル時代にあるラブホの顧問弁護士をしていた私はそう思っていたが、本作の雅代は? そんな本作からあなたは何を学ぶ?



■□■あちらは社会派! こちらは人生の機微を! ■□■

11月8日に観た『ホテルニュームーン』(19年)は、日本・イラン合作映画らしく社会派! それに対して、直木賞を受賞した桜木紫乃の原作を『100円の恋』(14年) (『シネマ35』186頁)、『嘘八百』(17年) (『シネマ41』72頁)等の武正晴監督が映画化した本作は、ヒロイン・田中雅代(波瑠)の生きざまを中心に描かれる人生の機微がポイント。したがって、本作には『ホテルニュームーン』のようなあっと驚く物語は登場せず、本作では「ホテルローヤル」を舞台に淡々とした生活が描かれ続けていくことに・・・。

冒頭、美大の受験に失敗した一人娘の雅代が「ホテルローヤル」を手伝っている風景が描かれるが、かなり居心地が悪そうだ。経営者の父親・田中大吉(安田顕)からは、「受験に失敗しても、お前にはこのホテルがある」と励まされ、母親・田中るり子(夏川結衣)からは、「客に説明するためアダルトグッズの使い方を覚えておきなさいよ」とアドバイスされていたが、これらは両方とも大きな勘違い。多分、まだ初体験も済ませていない雅代

の女ゴコロは傷つくばかりだ。しかし、北海道の釧路湿原を望む高台のラブホで生まれ育った雅代には、他に収入を得る当てもないから、結局家業を手伝うほかなし！？

### ■□■ラブホは雅代たちには日常だが、客には非日常！■□■

私は弁護士として忙しく活動していた時期に、あるラブホの経営者の顧問弁護士として親しく接していたから、本作と似たような名前、似たような設備、似たような値段のラブホの内部は知り尽くしている。また、弁護士として多種多様な事件を扱ったから、その中には、家の中で自殺したまま異臭を放っていた事件もあったし、本作と同じような、ラブホでの心中事件もあった。

もっとも、本作を観ていると、雅代や従業員の能代ミコ（余貴美子）、太田和歌子（原扶貴子）たちは部屋の様子をマイクで聞きながら楽しむという特権（？）があったが、いくらラブホの顧問弁護士をしていた私でも、そこまでの特権にあずかっていたことはない。したがって、本作に見るようなお客さんの“生態”については知る由もない。しかし、本作の「お客A」として登場するカメラマンとモデルのカップルや、「お客B」として登場する子育てと親の介護に追われている中年カップルの生態を観ていると・・・。

「ホテルローヤル」を職場にしている雅代や従業員たちにとっては、アダルトグッズを提供したり、隠しマイクから“あの時”の喘ぎ声を聞くのは日常だが、お客が「ホテルローヤル」に求めるのは“非日常”。本作前半では、2時間か、泊まりかは別として、「ホテルローヤル」にその非日常を求めてやってくるカップルたちの生態をしっかりと検証したい。

### ■□■この先生は意外に真面目！雨宿りから、どこまで？■□■

続いて、「お客C」として登場するのが、女子高生とその教師というカップル。教え子をラブホに連れ込む若い男性教師・野島亮介（岡山天音）は、よほどの悪人！そう思うのは当然だが、この2人は急に大雨に襲われたため、まりあ（伊藤沙莉）の提案で、2時間3600円の休憩コースを選択したらしい。したがって、「お客A」も「お客B」も、雅代たちはベッド上で展開されるセックス時の喘ぎ声を聞くことができたが、この「お客C」にはそれはなく、おしゃべりばかり。それを聞いていると、男は妻に裏切られたかのような境遇であるうえ、女子高生を強引に襲うことがないのはもちろん、女子高生の“お誘い”にも安易に乗らないまじめ教師らしい。もちろん、年齢的には教師の方が年上だが、2人の会話を聞いていると、全体的に女子高生の方が年上のような不思議な感じの会話になっている。

2人が利用しているのは、真ん中にバスルームのある豪華な部屋。しかし、雨宿り目的だけの利用なら、風呂は無意味だ。そう思っていると、原作は知らないが、本作では2人の会話の親密度が深まるにつれて、風呂にも入ることに。このまま休憩では時間オーバー確実だから、ひょっとしてお泊りコースに変更？そう思っていると案の定・・・？しかし、このカップルのその後のストーリー展開は？

### ■□■雅代のはじめての男は？その展開は？■□■

松山ケンイチは、『聖の青春』（16年）（『シネマ39』35頁）で不遇の天才棋士・村山聖役を鬼気迫る迫力で演じていたが、本作で彼が演じた宮川はそれとは正反対の、いわば空

気のような存在の男。もっとも、冒頭のシーンでるりにアダルトグッズの性能を説明していた彼が、その後雅代の部屋をノックし、「年頃のお嬢さんへの配慮を欠いていました」と謝る姿を見ていると、決して無神経な男ではないようだ。

まさかアダルトグッズの販売でボロ儲けすることはできないだろうが、逆に一定額のニーズは常にあるようだから、彼の商売は安定しているらしい。そのため、ホテル内で起きた心中事件によってホテルが経営危機に瀕したうえ、父親が倒れてしまったため、雅代がホテルの売却を決意すると、宮川は快く在庫の返品にも応じていたから良心的だ。

もっとも、それはちょっとしたビジネスの話だけで、雅代の心の機微を描く本作のポイントは、そこで雅代が、「セックスっていいものですか?」「私と試してみてくださいませんか?」と誘われた後の展開となる。まず、宮川が率直にそれに応じるかどうかは、多分あなたの想像通りだが、いざベッドインした後の意外な展開はたぶん予測できないだろう。これも原作がどうなっているかは知らないが、なるほど、なるほど……。

## ■□■破産?売却?事業譲渡?弁護士の活用は?■□■

北海道の釧路と釧路湿原を私は一度だけ観光したことがあるが、ハッキリ言って、そこは田舎。今風に言えば、近い将来の“消滅集落”だ。しかし、そこで生まれた雅代に同級生がいるのは当然だし、雅代と同じようにUターンして地元で働いている同級生がいるのも当然だ。

7編の連作を一つの物語にまとめた本作のラストは、車に乗り込んだ雅代が晴れ晴れとした表情で、次の人生に向かうシークエンスになる。そして、そうなるのは、本作のもう1人の主人公である「ホテルローヤル」自体が無事に売却（事業譲渡）できていることが前提だ。しかし、弁護士歴50年近くになる私に言わせれば、心中事件が起き、客がほとんど来なくなったラブホを、まともな価格で売却するのは至難の業。そこは、私も経験したように、破産しかない。それが私の弁護士としてのアドバイスだが、もちろん、本作には弁護士の出番もなければ、そんなストーリー展開もない。そこに登場するのは、捨てる神あれば、拾う神ありの姿だから、それに注目!

アダルトグッズの需要は間違いなく一定量あるように、ラブホの需要も一定量あるもの。それは、いくら釧路湿原が田舎だからと言って、変わるものではないらしい。雅代の同級生・美幸（富手麻妙）の決断はそんな“読み”に基づくものだが、さて、新たな従業者を迎えたラブホ「ホテルローヤル」の経営は?その繁栄は……?

2020（令和2）年11月25日記